

marina park city

西宮浜

マリナコミュニティ



子どもも大人も
元気いっぱい
ラジオ体操をしました。

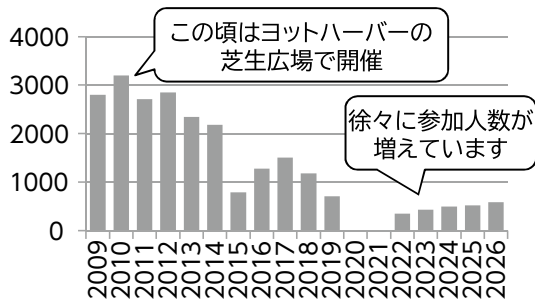
今年も7月18、24日までの1週間、西宮浜義務教育学校東校舎円形ホール前で、朝6時30分からラジオ体操（第1、第2）を元気いっぱい行いました。今年の参加者数は、累計で子ども402人、大人186人、合計588人でした。

参加賞として、参加者全員に毎日チューペットを1本、最終日は、子どもにだけチューペットとお菓子の詰め合わせ1袋を渡しています。

スポーツクラブ21西宮浜との共催で、ヨットハーバーの芝生広場が会場だった平成22（2010）年前後は参加者が3000人ぐらいいましたが、年々減少して令和4年のコロナ禍明けには348人まで減りました。その後、年々増加し、今年は昨年と比べて子どもが66人、大人が2人多く参加していました。

朝早く、阪神西宮駅辺りから参加した親子（4人）や前に立ってラジオ体操を積極的に行ってくれる子どもたち、大人の皆さんに助けられ、大変

ラジオ体操参加人数の推移



スタンプ帳は郵便局提供



青空の下でラジオ体操

感動しました。

また、先生やPTAの皆さん、マリサポのスタッフ、各まちのボランティア、西宮浜産業団地協議会の協力を得て、無事故で終わることができました。心から感謝申し上げます。ありがとうございました。

これからもラジオ体操を実施するので、皆さんの参加をお待ちしています。

（西宮浜地区青少年愛護協議会 三池）



円形ホールで輪になって盆踊り♪



夏まつり常連の西宮浜空手道

4回目となる夏まつりを、8月23日に西宮浜義務教育学校の東校舎（旧中学校）で開催しました。初めての学校開催でしたが、無事に終わることができ、子どもから高齢者まで約500人が地域の絆を深める1日となりました。

盆踊りではお手本役に導かれて子どもたちも輪に入り、老若男女で踊りを楽しみました。休憩時間のステージでは迫力ある空手の組手や華やかなフラダンス、元気いっぱいのキッズチアダンス、吹奏楽団「アンサンブルラポート」のサクソスパートのメンバーらが出演し、会場を盛り上げました。

屋台やゲームコーナーも大にぎわいで、特にかき氷店は行列が絶えないほどの大盛況でした。ゲームコーナーでは、西宮香風高校ボランティア部のメンバーが子どもたちを大いに楽しませていました。

4回目の夏まつりは義務教育学校で開催

事前募集に応募した9人のキッズボランティアが準備や屋台をサポートした他、寄付目的のバザーや13作品が集まった「浜のフォトコン」、西宮市キャラクター「みやたん」の参加など、新しい取り組みもあり、盛りだくさんの内容となりました。

春から実行委員会で企画、準備を進めてきました。事前準備や当日にご支援、ご協力いただいた多くの団体と個人の皆さんに、心より感謝申し上げます。

（西宮浜夏まつり実行委員長 木戸）



フォトコン1位は「梅雨に向かう夕空」



キッズサポーター作成の看板と西宮市キャラクター「みやたん」



屋台も大にぎわい

【救急特集】
西宮浜の

災害時救急医療を考える

〈行政・地域・医療が連携し、
命を守る体制づくりへ〉

渡辺史子

大規模災害が発生した際、

西宮浜では、橋梁が被災すると地域が孤立する恐れがあります。そのような状況で、けが人や急病人をどのようにに救護し、必要な医療につなげるのかという課題について考える意見交換会が開催されました。参加者は、市・保健総務課、市・防災危機管理課、西宮浜地域包括支援センター、マリナパーク協議会、西宮浜の防災・減災を考える会実行委員、災害医療の専門医、まちの減災ナース、DMAT・災害支援ナースなどです。

当日は、「西宮市災害時保健医療福祉活動マニュアル」などの資料を基に、保健総務課から、行政における災害時の保健・医療・福祉活動体制について説明がありました。続いて筆者から、西宮浜防災フェスタで実施した模擬救護所の検証結果と、西宮浜の地域特性を踏まえた災害時救急医療の課題を報告しました。

特に課題として挙げられたのは、①橋梁が遮断された場合の負傷者搬送手段（海路・ヘリ搬送）が十分に整理されていないこと②救護所から外部へ被災状況や負傷者情報を迅速に発信する仕組みが十分でないこと③高齢者施設が多い地域であり、外部支援や職員の参集が遅れた場合、介護や医療の提供に影響する恐れがあること、の3点です。

発表では、平成28(2016)年の熊本地震において、保健所と市町村との情報共有が十分でなかったことが支援の遅れにつながった事例が紹介されました。災害時には、被害状況や負傷者情報を早期に収集し、必要な支援先へ確実に伝える仕組みを、平時から準備しておくことが重要です。

保健総務課からは、災害時保健医療福祉活動支援システム(D24H)や広域災害救急医療情報システム(EMIS)を活用した情報共有体制について説明がありました。これらのシステムは発災後の運用が中心となるため、西宮浜の救護所や地域から、誰が、どのような手段

で被災状況や負傷者情報を発信し、支援を要請するのかを、あらかじめ具体化しておく必要があります。

さらに防災危機管理課からは、災害時には市職員も全員が出動できるとは限らず、西宮浜へ迅速に到着することが難しい場合も想定され、その説明がありました。そのため、地域住民が初動対応を行いながら、行政や外部支援につなぐ体制づくりの必要性について、参加者で認識を共有しました。

筆者からは、発災時に市職員がすぐに西宮浜に來れない状況でも、地域住民や高齢者施設の入所者の命を守るために、空飛ぶ捜索医療団ARROWS(アローズ・ウィングス・ジャパン)との連携についても紹介しました。ARROWSは、医師や看護師などによる医療支援、船舶やヘリコプターを活用した救助・搬送、被災現場での情報収集や支援要請などに取り組んでいます。西宮浜のように孤立が想定される地域では、こうした民間団体との協定や平時からの協力関係も、今後検討すべき選択肢の一つと考えられます。

国においても、令和7年の災害対策基本法等の一部を改正する法律により、災害支援の経験を持つNPO・ボランティア団体などを「被災者援護協力団体」として登録し、自治体と情報を共有する制度が始まりました。平時から行政と民間団体が「顔の見える関係」を築き、発災直後から支援につなげる官民連携が進められています。これにより、既に全国42カ所の自治体がARROWSと災害時連携協定を結んでおり、神戸市が今年4月に支援連携協定締結を発表しています。

また、7月には防災庁設置法が成立し、平時の事前防災から発災時、復旧・復興までを一貫して担う司令塔機能の強化に向けた準備が進められています。こうした国の動きからも、地域の特性に応じて民間団体との協力体制を平時から整えることの重要性が高まっています。

今回の意見交換会では、「災害時救急医療は、行政だけでなく、地域だけでも成り立たない。平時から顔の見える関係を築き、それぞれの役割を共有しておくことが何より重要である」という認識が

共有されました。

西宮浜の災害時救急医療体制を充実させるためには、橋梁遮断時の搬送計画や現場からの情報発信と支援要請の方法、高齢者施設を含む医療・福祉支援体制について、行政、地域、医療・福祉関係者、民間災害支援団体が共に検討し、実践的な訓練を重ねていくことが必要です。行政と地域が課題を共有し、解決に向けた第1歩を踏み出したことが、今回の意見交換会の大きな成果となりました。

(渡辺史子)

・日本災害医学会…災害医療コーディネーションサポートチーム
・日本災害看護学会…まちの減災ナース指導者



意見交換会の参加者たち

【講演会開催報告】
イタリアから学ぶ

これからの避難所のあり方

（災害関連死を防ぐキーワード）

「TKB48」とは

渡辺史子

■熊本の避難所で見た「避難した後」の現実

西宮浜公民館で、避難所・避難生活学会代表理事、市民保護研究所所長の水谷嘉浩さんを迎え、8月22日に講演会を開催しました。医療・防災関係者や地域住民など59人が参加し、災害から助かった命を避難生活の中でどう守るかを考えました。

筆者は講演に先立ち、7月28日に発生した熊本地震の被災地で支援活動に携わりました。現地では段ボールベッドの導入が進み、床に直接寝る避難生活の改善が図られていました。一方、断水が長引く地域では、手洗いや洗濯、清掃、入浴が難しく、感染症も見られました。DMAT・JMAT、日本赤十字社などが巡回し、診療や災害関連死の予防に努めました。

時間がたつにつれ、必要な支援も変わります。ランドリー車、子どもの遊び場、受験生の自習室などが整えられま

したが、生活環境が整うまでには時間を要しました。暑さ、睡眠不足、プライバシーの問題、食事、衛生、入浴、洗濯など、一つ一つの「我慢」が積み重なると、体調悪化や持病の増悪につながります。

■「避難所に入れた」だけでは命は守れない

水谷さんが問いかけたのは、私たちが当たり前と思っていた「避難所」の姿です。体育館の床に毛布を敷き、簡易な食事を受け、復旧まで耐える。しかし、災害から助かった人が、避難生活によって健康を損ない、命を落とすことがあります。避難所は単なる一時滞在場所ではなく、生命と健康を維持する生活環境でなければなりません。

■48時間以内に

整える「TKB48」

その鍵が「TKB48」です。Tはトイレ・シャワー、衛生、Kはキッチン・食堂、栄養、Bはベッド・生活空間、睡眠。発災後48時間以内にこれらを整え、避難生活をできるだけの日常に近づける考え方です。清潔なトイレ、温かく栄養のある食事、十分に休めるベッドは「ぜいたく」ではなく、命を守るために必要な環境で

す。

水谷さんは、トイレ・シャワー、キッチン、食堂、ベッド、居住用テントなどを一体で備え、被災地外から資機材と専門人材が支援に入るイタリアの仕組みを紹介しました。必要な設備、物資、人材、運営方法を標準化し、必要な地域へ迅速に動かす「SUM基準」の重要性も示しました。

■西宮浜だからこそ考えたい「医療」と「避難所生活」

西宮浜では、橋梁の通行止めや浸水などで通常の陸路が使えなくなり、外部からの医療支援がすぐ届かない恐れがあります。だからこそ、発災直後の救命・救急だけでなく、「避難所生活によって新たな患者を生み出さない」環境づくりが重要です。

避難生活が長期化すれば、感染症、脱水、慢性疾患の悪化、睡眠不足、活動性の低下、精神的ストレスなど、生活環境から健康問題が生まれます。トイレや食事、ベッド、手洗い、入浴、洗濯、冷暖房、プライバシー、子どもの生活や学習環境までを、健康を守るための備えとして考える必要があります。

西宮浜でも、避難所に何人

収容できるだけでなく、「数日、数週間を健康に過ごせるか」という視点で点検することが必要です。高齢者、障がい者、慢性疾患がある人、乳幼児、妊産婦、外国人、ペット同行避難者など、多様なニーズを想定し、医療・福祉・行政・地域住民が連携する仕組みを平時から整えておくことが求められます。

■「聞きに来て本当に良かった！」「避難所の概念が変わった！」

講演後に参加者からは「目からうろこが落ちた」などさまざまな声が寄せられました。「避難所＝我慢する場所」ではなく、「災害から逃れた命を、その後も守り続ける生活の場」という考え方が共有されました。

■「我慢する避難所」から「命を守り健康を維持する避難所」へ

災害そのものをなくすことはできません。しかし、避難生活の環境を事前に整えることで、防げる健康被害や災害関連死があります。段ボールベッド一つ、手洗い場一つ、洗濯できる環境一つが、避難者の生活と健康を大きく変えます。

TKB48とSUM基準を参考に、西宮浜でも「トイレ」「食事」「睡眠・生活空間」「水・衛生」「医療・福祉との連携」「要配慮者への支援」などの視点から備えを見直していきましょう。行政や医療・福祉、民間事業者、外部支援組織とつながり、「受援」の仕組みも平時から訓練しておくことが大切です。

「避難できたから安心」ではなく、「避難した後も命と健康を守る」。今回の講演会は、西宮浜の避難所を「我慢する場所」から「命を守る生活の場」へ変えていくための大切な第1歩となりました。



水谷さんの話に聞き入る参加者



西宮浜のひとびと(37)

岸浦 秀行さん

(桜のまち)



地域活動で見つけた

西宮浜の魅力

震災後、仮の住まいを経て、

永住の地として西宮浜を選び、平成11(1999)年に引越して来ました。転居当初から、長らく西宮浜の中を散策することはほぼなかったのですが、ごく最近になって地域活動に参加し、西宮浜を歩く機会が増えたそうです。「27年住んでいても、初めて入る場所や建物があるんです」と、長年暮らしてきたまちでの新しい発見を楽しんでいます。

西宮浜の自慢の一つが、西宮浜さくら祭でもおなじみの桜並木。最近、夙川の桜並木と西宮浜の桜並木が延長線上にあることを知り、驚いたそうです。「なぜそうなっているのか」と、気になったことをさらに掘り下げて調べるの

も楽しみの一つです。

もともと読書や雑学を調べ

ることが好きで、知らないこ

とを見つけると、インターネット

トや書籍、専門書などで夢中

になります。正解にたどり着

けなくても、その過程で得た

知識が別のところで役立つこ

ともあります。最近では、さま

ざまなYouTube チャンネル

を探したり、神奈川県発祥の

書店のチャンネルを応援する

「推し活」も楽しんでいます。

仕事、介護、地域活動に同

じくらの時間をかけ、現在は

西宮マリナパークシティ協

議会防犯部会でも活動中。地

域の皆さんと協力し、防犯に

ついて知ってもらうための取

り組みを進めています。四季

折々の草花を楽しめる環境を

残しつつ、商業施設も充実した

より暮らしやすい西宮浜にな

るのが岸浦さんの願いです。

「この平穏な風景を楽しむ生

活が、いつまでも続くという

ですね」地域に関わるように

なったからこそ見えてきた、

西宮浜の新しい魅力。「これか

らも地域の皆さんと共に、住

みやすいまちづくりに関わっ

ていきます」

(桜のまち広報 左近)

こんにちは！西宮浜担当で戻って来ました。

西宮市社会福祉協議会の高井です

西宮浜地区を担当することになった西宮市社会福祉協議会(社協)の高井茜里です。久しぶりに西宮浜の地域を見てみると、喫茶や食事会などの活動に加えて、ボッチャや体操を通じた交流の場が新たに誕生していて驚きました。住民の皆さんのさまざまな思いをきっかけに活動が始まり、継続する中で、参加する住民同士のつながりが生まれているのだと感じています。

また、スーパーや郵便局で立ち話をする様子や、朝夕の散歩でおしゃべりしている姿もよくお見かけします。暮らしの中で自然と気にかける合っている、そんな西宮浜の雰囲気が好きです。

ところで皆さん、「社協」のことはご存じでしょうか？私たちは、子どもから高齢者まで、そして障がいのある人も、誰もが住み慣れた地域で安心して暮らせるよう、「福祉」の視点からまちづくりを進める民間団体です。現

在は全市的にマンションが

増え、同じ階以外の人と顔を

合やす機会が減っていたり、

活動に参加したくても参加

できない事情があったりと、

地域のなかで孤立して暮ら

している人が増えているの

が実状です。そんな状況で、

暮らしづらさを抱えた人が、

実は私たちの身近な所で暮

らしています。

西宮浜の魅力を大切にしながら、困りごとや地域で起きている問題について、日々の暮らしの中で気づき、地域の皆さんと話し合って、より良い地域づくりを一緒に進めていきたいと思っています。

まちでお会いした際は、お気軽にお声がけください！どうぞよろしく願います。

問い合わせ…西宮市社会福祉協議会 地域福祉第2課
(TEL0798・23・1140)



2児の母です！ 休日によく家族で西宮浜に遊びに来ています！

西宮浜公民館地域学習推進委員会 講座のお知らせ

親子でつくるエンディングノート

- ・日時：11月23日(月・祝)
- ・講師：末藤智也氏
- ・講座の内容説明：今からの備えに活用できるエンディングノートの活用方法を、最近の事例を含めて解説します。

これからの人生 安心して生きるために

- ・日時：11月28日(土)14時～
- ・講師：司法書士 岩本健熙氏
- ・講座の内容説明：財産管理や後見制度、死後事務委任など将来の安心のための制度を分かりやすく解説！